様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２９ 日現在

機関番号：３６１０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ１６４７７

研究課題名（和文）アフロ・ブラジル文化カポエイラの基層理念

研究課題名（英文）Afro-Brazilian culture Capoeira's underlying philosophy

研究代表者
細谷　洋子（HOSOTANI, Yoko）

四国大学・生活科学部・講師

研究者番号：６０３８９８５６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、ブラジル伝統格闘技カポエイラの基層理念「マリーシア」の意味を明らかにし、カポエイラの組手において「マリーシア」を具現化する身体技法を駆け引きの発生の観点から読み直すことである。得られた結論は次の通りである。①「マリーシア」はラテン語のmalitia(悪徳)を語源とし、カポエイラの実践過程において「マリーシア」に肯定的な意味合いが含意されたと推測される。②カポエイラの組手において既存の技に、「裏をとる」「待つ」「方向を変える」の3つの目的が加わることで「マリーシアを伴う技」として駆け引きが可能になる。また「マリーシア」の具現化にカポエイラ独特の足運び「ジンガ」が重要な役割を担う。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to clarify the meaning of the underlying philosophy "Malicia" of Brazilian traditional martial arts Capoeira and to reexamine the body technique which embodies "Malicia" at the Capoeira game from the viewpoint of bargaining. The conclusions obtained are as follows. ①It is presumed that "Malicia" is derived from the meaning of malice and a positive meaning was added through the practice process of Capoeira.　② By adding three goals of "taking the back," "waiting" and "changing the direction" at the Capoeira game will make it possible for a bargaining with a "technique accompanying Malicia". In addition, Capoeira's characteristic step "Ginga" plays an important role in the realization of "Malicia".

研究分野：スポーツ文化人類学

キーワード：カポエイラ　アフロ・ブラジル文化　身体技法　マリーシア　基層理念　ブラジル　駆け引き　文化的固有性

１．研究開始当初の背景

カポエイラとは、300～400 年ほど前に、アフリカ系住民らの文化の影響によってブラジルで創出された格闘技である。カポエイラは、音楽リズムを伴う実践形式や身体技法、独特の理念に基づく勝敗観によって特徴づけられ、近年、ブラジルの歴史を象徴する文化として、ブラジル国内外に広く知られるようになっている。

そうした中、カポエイラの国際競技化や観光資源化によって、「カポエイラらしさ」の希薄化が実践者間で問題視されて久しい。

例えば観光資源化については、素早い蹴りとよけの攻防や、派手なアクロバットの強調といった、いわゆる身体技法の高速化・高度化を伴う変容によって、攻防における厚い駆け引きや土着的な曖昧さが損なわれている（細谷、2015、110-128）。

また、2008 年～2014 年に筆者が 6 回実施したブラジルでの現地調査（参与観察含む）によれば「カポエイラらしさ」が伴う「良いジョゴ（組手）」の探求が、実践者らによって恒常的に取り組まれており、「マリーシア」等の理念が重視された（細谷、2014、5）。

これらのことより、実践者間では「カポエイラらしさ」の希薄化が懸念され、良いジョゴ（組手）の探求がなされることを踏まえ、カポエイラの固有性である「カポエイラらしさ」を実践者らの営みを手掛かりに紐解くことを目指した。

２．研究の目的

本研究は、ブラジル格闘技カポエイラの基層理念「マリーシア」の意味を明らかにし、カポエイラのジョゴ（組手）において「マリーシア」を具現化する身体技法を駆け引きの発生の観点から読み直すことを目的とする。

３．研究の方法

日本語、英語、ポルトガル語文献による文献研究、ブラジルにおける現地調査を行った。ブラジルでは、文献資料収集に加え、参与観察、インタビュー調査、動画資料等の一次資料収集を行った。

４．研究成果

(1) カポエイラの概要

① カポエイラの起源

先述のように、カポエイラは、300～400 年ほど前に、アフリカ系住民の文化の影響を受けてブラジルで創出された格闘技である。けれども、カポエイラの起源や成り立ちについては、現在も研究者の間で様々な説が論じられている。中でも、歴史学者のソアレスによれば、カポエイラはブラジルにおける黒人奴隷によって創出されたが、アフリカ系黒人のみならず「クリオウロ（ブラジル生まれの黒人）」も都市でカポエイラに興じるようになり、植民地時代のおわりには町や村の路上で行われていたという（ソアレス、2010、47）。よって、カポエイラはその起源によれば、奴隷だったアフリカ系黒人という、ブラジルにおいては周縁的マイノリティのエスニック・グループの慣習的活動であった。

② カポエイラの実践形式と身体技法

カポエイラの実践形式は非常に個性的で、民族楽器（弦楽器と打楽器）の演奏やコール&レスポンス形式の合唱と手拍子によるリズムに合わせて行われる。また、ジョゴ（組手）を行う二人を取り囲む人垣によって場は区切られ、カポエイラが行われる場はホーダ（集会型組手）と呼ばれる。

図１　カポエイラのホーダ（細谷撮影、2016）

さらには、ジョゴ（組手）では「ジンガ」と呼ばれるリズミカルなステップをベースに、蹴りやよけ動作に加え、多様な駆け引き、アクロバットが行われ、舞踊性と格闘性、遊戯性、芸術性が融合した身体技法が特徴である。

初心者であれ、熟練者であれ、二人で行うジョゴ（組手）において重要なことは「質問と応答」という相手とのやりとり、駆け引き、即興のコミュニケーションである。カポエイラのいかなるスタイルや流派においても、この「質問と応答」はカポエイラのジョゴ（組手）における重要な視点とされており、「良いジョゴ（組手）」の実現を目的に、カポエイラの一般的なジョゴ（組手）は行われている（細谷、2015、67-71）。ただし、「良いジョゴ（組手）」は、グループによって体現される形式が異なることがあり、身体技法としての細かな所作や動きの展開パターン等は多種多様である。

③ カポエイラの国際化と政治利用

カポエイラは1970年代になると欧米で普及し、1990年代から日本でも本格的に実践者が拡大し始めた。現在は、アフリカやロシア、中東、オーストラリア等世界各国でカポエイラが普及しており、国際的にも知名度は高まりつつある（ファルコン、2010、125-131）。このようにカポエイラは、その実践におけるコミュニケーション性（DOWENY、2008）や運動効果（MAZINI FILHO et al、2013）も着目され、教育のツールやエクササイズとして評価を得ている。

一方で、カポエイラは、その歴史背景のインパクトの大きさから、たびたびブラジルのナショナリズム政策に、利用されてきた経緯がある。

ブラジル国内では、1930年代と1980年代においてブラジルの多人種多民族の国民性の象徴としてアフリカ系ブラジル文化（以下、アフロ・ブラジル文化）が掲げられ、カポエイラはその代名詞（1930年代は混血性、1980年代は多様性の象徴）とされた（細谷、2015、22-30）。その後、2003年には学校教育におけるアフロ・ブラジル文化の教育が法令により義務化され、2006年にはインディオ文化の教育も法令によって義務化され、教育における多文化主義実施の法整備につながった。また、2008年にはカポエイラのホーダが、ブラジル歴史芸術遺産研究所によって国内無形文化遺産に指定され、2014年にはユネスコの無形文化遺産として登録された。こうしてカポエイラは名実ともにブラジルを代表する身体文化として知られるところとなった（細谷、2015、30-34）。

(2) カポエイラの基層理念としての「マリーシア」

① 「基層理念」について

本研究における主題である「基層理念」とは、筆者の造語である。民俗学や社会学等で主に用いられる基層文化という概念は、文化を表層と基層に区分したナウマンの二層化説に基づく（岩本、2006）。こうした文化観に依拠し、カポエイラという身体文化に、共時・通時的に通底する理念という意味で「基層理念」とした。

② 「マリーシア」の語源と意味

「マリーシア」は日本語では「ずる賢さ、抜け目のなさ」と訳されることがこれまで多かったが、「マリーシア」は「悪知恵、悪賢さ、狡知」といった否定的な意味のほかに「知恵、機敏さ、要領の良さ」という肯定的な意味をもつ（武田、2014、62）。

また、「マリーシア」は、ポルトガル語辞典（第6刷）によれば、「①悪意、邪心、意地悪、②機敏、鋭敏、ずるさ、抜け目のなさ、③からかい、皮肉、揶揄、辛辣な言葉」とある（池上他、2002、753）。ブラジル・ポルトガル語オンライン辞書では、「マリーシアは悪意のある行為を働くための傾向や思考を意味するラテン語のmalitiaを語源とする女性名詞である」（訳出は筆者による）とある（http://www.significados.com.br/malicia/、2017年9月20日参照）。ラテン語のmalitiaは、羅和辞典によれば「1.意地悪な性向（行為）、2.悪徳、欠陥」を意味する（水谷、2009、381）。総じて、「マリーシア」は「意地悪な性向、悪徳」という本来の否定的な意味に加え、「機敏、抜け目のなさ」という肯定的なニュアンスを含意する用語となっている。先述のように、現在、カポエイラ実践者間では「抜け目ない・機転が利く・知恵がある」という肯定的意味で用いられることが多いことを踏まえると、単に悪だくみの意味だった「マリーシア」は実践過程で新たな意味が付帯されたと推察される。

③ 「良いジョゴ（組手）」の判断基準としての「マリーシア」

カポエイラのジョゴ（組手）の駆け引きや身体技法では「マリーシア」が十分に生かされている（以下「『マリーシア』のあるジョゴ」と呼ぶ）かどうかが重視される。その際、抜け目なく知恵を生かした駆け引きや振る舞いの有無が判断基準になる。

さらに、「厚みのあるジョゴ（組手）」を実現するためには、機転を利かせて様々な動きや駆け引きを繰り出す必要がある。また、相手の裏をかいた戦術的な展開も求められてくる。このように「マリーシア」によって「厚みのあるジョゴ（組手）」が実現する。

④ 「マリーシア」の相対性と曖昧性

しかしながら、一般的にカポエイラのジョゴ（組手）におけるマリーシアのある駆け引きや振る舞いは、絶対的な基準とはいえない。ジョゴ（組手）の文脈に応じて適した対応は異なってくる。そのため、望ましい駆け引きや振る舞いは、ジョゴ（組手）をしている2人と、楽器演奏者を含む輪を囲む人々がそれぞれに有する経験を基盤に、その場で共有される基準が、暗黙の裡に毎回創られているといえる。そのため、ジョゴ（組手）によって全く異なる基準が採用される可能性も生じてくる。

つまり、「マリーシア」は、カポエイラにおいて、相手と共同して創造性の発揮が目指される「共創的ゲーム」の判断基準として機能する。そして、その基準は絶対ではなく、場にいる人々による暗黙裡の交渉によってその都度見いだされる相対的で曖昧な判断基準といえる。そして、「マリーシア」は基層理念としてカポエイラの実践時に常に意識される理念として、身体技法や戦術の固有性の形成に寄与している。

(3) 「マリーシア」のあるジョゴ（組手）の実際

① 駆け引きの発生パターン

実際のカポエイラのジョゴ（組手）における駆け引きについて、身体技法の特徴を動画資料に基づき析出した。

ジョゴ（組手）は、楽器演奏のテンポや用いられる身体技法の差異に基づき、種類が分けられる。その中でも特に複雑な駆け引きが生まれやすいベンゲラというゆっくりとしたテンポのジョゴ（組手）を中心に、計 14 組分（各組約 50 秒～約 1 分、実践歴 10 年以上の男性 11 組、女性 3 組）を対象とした。

ちなみに、ゆっくりとしたテンポとは、目安として「Andante 歩くような速さで（♩＝63～76)」から「Moderato 控えめなスピードで（♩＝76～96)」の中ほど（♩＝92 くらい）までの速さである。

これらの動画は、2015 年 8 月 19 日、8 月 20 日、8 月 22 日にブラジルのリオデジャネイロ州で記録したものである（細谷、2017、42-45)。分析結果から、組手における駆け引きを発生させる展開を抽出し、類似したものをまとめ、さらに展開の目的に基づき分類した。

その結果、駆け引きを発生させる展開として、「A 裏をとって攻撃」「B 待って攻撃／待って裏をとる」「C 方向を変えて攻撃」「D 攻撃後裏をとる／攻撃後攻撃」の 4 パターンが抽出された。B の「待って」というのは、タイミングをつかむために動きながら狙って待つ場合と、相手に裏をとられ不意に反応する場合の 2 パターンが見受けられた。後者は意図的に待っているわけではないが、表層に現れる展開は同様のため、同じ分類としている（細谷、2017、42-45)。

② 「マリーシアを伴う技」の生成

今回対象にしたジョゴ（組手）では、「裏をとる」「攻撃」「方向を変える」「待つ」という動きの組み合わせによって「マリーシア」のある攻撃が展開されていることがわかる。「攻撃」は、蹴りや倒し技等が該当し、カポエイラの身体技法においても既存の「技」として実践者間で認識されている。その一方で、「攻撃」以外の「裏をとる」「方向を変える」「待つ」という動きは、既存の「技」として特定の動きがあるわけではない。むしろ、これら 3 つの動きは、カポエイラの既存の「技」と「技」（蹴り、よけ、アクロバット、移動、倒し技等）を接続し、駆け引きへと繋がる「技」の目的となる。いい換えれば、「技」以外のこうした動きは、ジョゴ（組手）の駆け引きの充実に不可欠といえる。

カポエイラのジョゴ（組手）では、駆け引きをするために「技」以外のさまざまな動きを、機転を利かせて選択して即時に展開していく必要があり、特に駆け引きを発生させる「裏をとる」「待つ」「方向を変える」の 3 つの目的が加わることによって、既存の「技」は「マリーシアを伴う技」として機能しうると考えられる。

そしてその際に、動きのベースとなるのは、先述した「ジンガ」である。「ジンガ」はカポエイラのすべての流派やスタイルに共通している。原則として、地面に描かれた三角形の頂点を踏むように左右交互に足を運ぶステップである。「マリーシア」の理念によって、カポエイラの既存の技（蹴り、よけ、アクロバット）と次の技をつなぐために「ジンガ」は必要不可欠な身体技法であり、「マリーシア」の具現化に重要な役割を担っている。

参与観察において観察された動きに基づけば、「ジンガ」では、次の技に備えるために体勢を整える、よける、相手と動きの調子を整える、カモフラージュする等が可能である。「ジンガ」はリズムと同義語として用いられることもあり（Delamont et al.、2017、199)、そのリズミカルな動き方ゆえに、カポエイラのジョゴ（組手）において、理念「マリーシア」を伴う駆け引きの誘発に有効であると考えられる。駆け引きの発生パターンに加え、「ジンガ」を伴うことによって「マリーシア」のあるジョゴ（組手）が具現化される。

(4) 今後の展望

本研究で扱った問題は、エスニック・スポーツや伝統芸能が国や文化を超えて展開されるときに必ずといっていいほど問題とされる文化の固有性である。カポエイラの場合は、基層理念「マリーシア」によって、身体技法や実践形式が方向付けられるため、カポエイラ特有の相対的で曖昧な基準が形成され、それは「カポエイラらしさ」と捉えられた。

さらには、こうした地域に固有のエスニック・スポーツが、当該地域における競技スポーツへの波及を調査することによって、エスニック・スポーツの有用性に資する知見の提示を試みたい。当面は、ブラジルのサッカー競技へのカポエイラの影響について、調査を進めていく。

＜引用文献＞

① DELAMONT、Sara・STEPHENS、Neil・CAMPOS、Cloudio、Embodying Brazil :an ethnography of diasporic aapoeira、Routlege、2017

② DOWNEY, Greg、Scaffolding imitation in Capoeira: Physical education and Enculturation in an Afro-Brazilian art、American Anthropologist、110(2)、204-213、2008

③ ファルコン、ジョゼ・ルイス・シルケイラ、16.カポエイラの国際化、ブラジル連邦共和国外務省、前田和子訳、texts of Brazil カポエイラ、2010、123－133

④ 細谷　洋子、カポエイラにおける授業構成の観点と「ジョゴ」概念―リオデジャネイロ市Ｊ幼稚園の授業パターンに基づいて―、日本女子体育連盟学術研究、30

巻、2014、1－16
⑤ 細谷　洋子、アフロ・ブラジル文化カポエイラの世界、明和出版、2015
⑥ 細谷　洋子、カポエイラにおける理念「マリーシア」と身体技法、四国大学紀要、49 巻、2017、37－46
⑦ 池上　岑夫・金七　紀男・高橋　都彦・富野　幹雄、現代ポルトガル語辞典（第 6 刷）、白水社、2002
⑧ 岩本　通弥、戦後民俗学の認識論的変質と基層文化論：柳田葬制論の解釈を事例にして、国立民俗博物館研究報告、132 巻、2006、25－98
⑨ MAZINI FILHO、Mauro Lucio・IGNACIO、Nara・RODRIGUES、Bernardo Minelli・DE OLIVEIRA VENTURINI 、Gabriela Rezende・AIDAR、Felipe Jose・DA SILVA、Francisco de Assis・GAMA DE MATOS、Dihogo 、The effect of training in capoeira in the agility and flexibility in adolescents males 、Revista Brasileira de Prescrição e Fisiologia do Exercício 、7(42) 、459-467、2013
⑩ 水谷　智洋、羅和辞典改訂版、研究社、2009
⑪ ソアレス，カルロス・エウジェニオ・リバノ、5.グアルダ・ネグラ（黒人護衛隊）―政治舞台に登場したカポエイラ、ブラジル連邦共和国外務省，前田和子訳、texts of Brazil カポエイラ、2010、45－52
⑫ 武田　千香、ブラジル人の処世術―ジェイチーニョの秘密―、平凡社、2014

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）
① 細谷　洋子、カポエイラにおける理念「マリーシア」と身体技法、四国大学紀要、査読無、49 巻、2017、37－46

〔学会発表〕（計 3 件）
① 細谷　洋子、カポエイラの身体技法「ジンガ」とマリーシア―ブラジルサッカーを題材にした映画による描写を手掛かりにして―、日本スポーツ人類学会第 19 回大会、2018
② 細谷　洋子、カポエイラの理念「マリーシア」の読み直し―ロベルト・ダマッタの三元論的視点から、日本スポーツ人類学会第 18 回大会、2017
③ Yoko HOSOTANI、A etnografia da Capoeira ; A originalidade cultural criada no Rio de Janeiro 、Simposio Abada Capoeira #1、2016

〔図書〕（計 1 件）
① 細谷　洋子、「ブラジルのカポエイラ」、寒川　恒夫編著、よくわかるスポーツ人類学、ミネルヴァ書房、2017、198－199

６．研究組織
(1)研究代表者
細谷　洋子（HOSOTANI, Yoko）
四国大学・生活科学部・講師
研究者番号：60389856